



# 川畑嘉文

フォトジャーナリスト／かわばたよしふみ

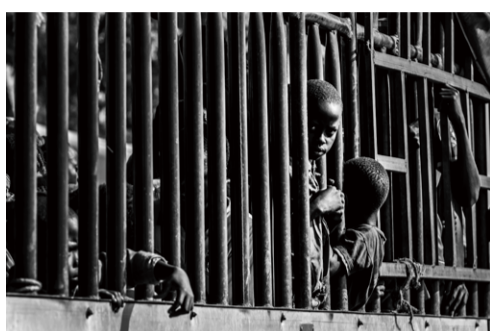
profile ●千葉県出身。ペンシルベニア州立大学卒業後、ニューヨークのニュース社に記者として勤務。2002年、ニュース社を退職しタリバン政権崩壊後のアフガニスタンに渡る。2005年にフリーランスとなり、以降、世界中の難民キャンプや貧困地域、自然災害の被災地などで取材を行い、雑誌や新聞などに写真と原稿を寄稿している。ドキュメンタリー動画の製作にも携わり、途上国の現状を伝える活動も行なっている。

世界中で厳しい生活が続いている人たちの「心」を写し伝えたい

9.11テロ事件をきっかけにフォトジャーナリストとなり、世界中の難民キャンプや貧困地域などの取材を続けている川畑さんに、取材に対する思いや志を伺いました。



タリバン政権が崩壊し、小学校に通えるようになった少女たち。



南スーダンからウガンダに逃れてきた少年。トラックに乗り難民居住地区へ移動する。

フォトジャーナリストになる前は記者だったようですが？

学生時代はものを書く仕事に就きたいと思っていて、ペンシルベニア州立大学を卒業後、ニューヨークの出版社に就職しました。当時は、ビジネスのニュース記事を担当していたので、いま自分が携っている国際政治とはだいぶ違う分野の記事を書いていた。

フォトジャーナリストになったきっかけは何ですか？

2001年9月11日に起きた「アメリカ同時多発テロ事件」で、記者として報道に携わったことがきっかけです。当時住んでいたマンハッタンの対岸から、飛行機が激突した貿易センタービルが見えて、直後にテレビのニュースでテロだと知り、慌てて五番街にある会社に向かいました。その日は記者の先輩たちが収集した情報を編集していました。そして夜になり、作業を終えてから先輩と二人で貿易センタービルに写真を撮りに行ったんです。それがフォトジャーナリストとしての僕の原点でした。

その後の経歴を教えてください。

2002年にアメリカの出版社を退職し、8ヶ月ほど世界を放浪しました。アメリカからイギリスに渡り、ポルトガルを経て陸路で中国へ向かう旅だったんですが、最大の目的はアフガニスタンに行くことでした。その旅を終えて日本に帰り、東京の写真事務所にて2年間所属して撮影技術を学んだ後、再びアフガニスタンに渡りました。そのときは、フリーランスのフォトジャーナリストとして、地雷の除去現場の取材をメインで行いました。

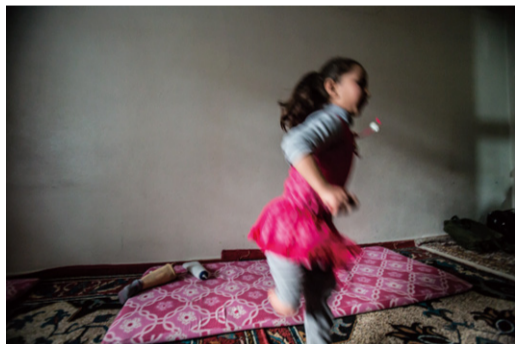
これまでどのくらいの国と地域を取材されたんでしょうか？

アジア、中東、アフリカ、ヨーロッパ、中南米の20カ国以上を取材しています。アフガニスタンのほか、シリアやトルコ、スーダン、ミャンマーの難民キャンプやカンボジアの地雷群、アフリカの貧困地域、自然災害の被災地なども取材しました。



フォトジャーナリストとして取材を続けられてきて、いまどんな思いを抱かれていますか？

世界各国の難民キャンプを多く取材してきましたが、内戦等で移民になった人たちが難民キャンプに入れたことで安全が得られるかという、そういうわけではないということを実感しています。支援の行き届いていない小さなキャンプや、プライバシーの制限があるキャンプには入らず自力で生活しようとする人たちもたくさん見えました。



空爆で右足を失ったシリアの少女。トルコで難民として暮らしている。

自分には関係ない遠い国のことと考える人は多いかもしれませんが、私たちが住む地球上にそんな人たちがいると知ってほしいと思います。人間の最大の罪は、無関心であることです。遠い国で何が起きているのか、自分たちと同じ一般市民がどんな状況に置かれているのか、事実を知り自分に何ができるかを考えることが大切だと思うんです。

最近の活動内容を教えてください。

雑誌や新聞の寄稿、個展やグループ展、講演といった活動が主です。今年は写真家グループで神田のスペースを借りてギャラリーとして運営することが決まっています、4月にグループ展、その後個展を開催する予定です。

コロナ禍で、海外での取材ができないのがもどかしいです。コロナ禍の難民キャンプがどんな状況か、医療は提供されているのかを確認するために、今すぐにも取材に行きたいと思っていますが、万が一自分が現地で感染源になってしまったらと思うと、それもできないです。コロナ禍のいまも、内戦で国を追われ、難民として厳しい生活が続いている人たちが変わらず存在します。いまは世界中がコロナ禍で、どの国も自国のことで手一杯という状態になっていますが、そんな彼らの存在を、なかったことにはできないのです。

フォトジャーナリストとしてご自分がやるべきことは何だとお考えですか？

難民キャンプや被災地で取材をするのは、すごく失礼なことだと常に考えています。見ず知らずの外国人が、食料支援をするわけでもなくただ辛い戦争の体験談を聞いてきて、写真まで撮るわけですから。他人の家に土足で入っていくようなものなんです。だからこそ、取材に応じてくれた人たちから聞いた話を、撮らせてもらった写真を何とかして発表しないといけなと思い続けています。発表することが取材させてもらった人への恩返しだと思っています。

取材するときに心がけていることは何ですか？

現地で取材した人には、「僕はあなたのことを絶対に忘れません」と必ず言うようにしています。取材に応じてくれた人たちの苦しみを忘れずに伝えることが、僕の使命だと思っているので。撮影するときに意識しているのは、被写体になってくれる人の「心」を写すことです。写真を見た人が、そこに写っている人を見て、その人がどういう気持ちでいるのかを感じてもらえるような写真を撮ることを心がけています。

今後実現したいことと、将来の夢は何ですか？

まずは、アメリカが撤退した後のアフガニスタンに行きたいと思っています。それから、自国に帰還し難民ではなくなった人たちの生活も取材したいです。

将来の夢は…、夢というか希望になりますが、フォトジャーナリストとしての活動を生涯続けていくことですね。

フォトジャーナリストを目指している人へアドバイスをお願いします。

フォトジャーナリストとして自分が大切にしていることは、「正しく知ろうとすること」です。写真の技術の勉強よりもまず、現地で起きていることをきちんと勉強して知識としてしっかり身につけてから取材に臨むことが大事だと思います。そして、たくさんある情報に惑わされずに、実際に現地に飛び込んで正しい情報をしっかり掴むことが大切だと思います。

取材させてくれた人たちに還元することも大切です。人の家に土足で上がり込むようなことをしているのですから、形にして発表してたくさんの人に伝えることが、取材した人たちへの恩返しになると思うので。

読者のみなさんへメッセージをお願いします。

「知ることを、忘れないでほしいです。コロナ禍で大変苦しい思いをしている人が多いと思いますが、難民として暮らす人や被災地の人たちのように、過酷な避難生活プラスコロナで苦しんでいる人たちが存在することを、ほんのすこしでもいいので思い出してもらえたらと思います。